◆2021 年 10 月第 5 週の礼拝説教

■日時：2021 年 10 月 24 日（日）10：30－11：30 降誕前第 8 主日

■場所：立川教会

■説教：道家紀一牧師

■説教題：「捨てて拾う人生」

■交読詩編 51：3－11（p59）

■聖書：ルカによる福音書 6：1－11（新約 p111）

■讃美歌：201「天使のことばも」・438「若き預言者」

１．

ゲネサレト湖畔に着きますと、大勢の人々が、押し寄せて来ました。主イエスの話しを聞くためにです。大勢の人を前にして、イエスは、ある妙案を思いつきます。湖畔にある二そうの舟に目を留められます。それはシモンの舟でした。イエスはそれに（ペトロに聞く間もなく）ひょいと乗ってしまわれます。先に姑をいやしていただいたイエスですから、知らないわけもなく、感謝もしていたでしょうが、しかしあまりの出来事にペトロはさぞ驚いたことでしょう。

当時の漁は夜でした。朝には舟を陸に上げて、網などの手入れをしていました。そのときに起こったのです。人間がその仕事を終えて、最後の仕上げをして、帰ろうとするとき、まさに人間が手を休めようとするとき、神が、イエスが、声をかけて来るのです。

仕方なく、ペトロは、いわれるままに、船を漕ぎ出します。主イエスは、陸から離れて、湖上の舟の上から、陸にいる人々に向かって、神の言葉、神さまの話しを始められたのです。

神は、あらゆるところから、あらゆるときに、必要とあらば、語ってくださいます。

２．

話し終えますと、イエスは、今度は、ペトロに命じます。「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい」よ。陸に帰るとばかり思っていた彼は驚いて言葉を返します。「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした」と。聖書では、この後続けてペトロが「しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましょう」と直ぐ語ったように書かれていますが少し間があったように思います。意外の知らせ、想定外の言葉、それが神

の言葉であることがあります。しかし、その声を耳にしたとき、わたしたちは抗います。疑問に思います。分からなくなります。そのとき、どうすればよいのか。そこで、祈るわけです。

祈るには、方向付けが必要です。闇雲に祈っても駄目です。ここで決定的なのは、イエスに出会っている、イエスを目の前にしている、ということです。ここが肝心です。ペトロは、他の人だったら、「先生、駄目駄目、今日はもう漁は終りですよ。帰りましょう」と譲らなかったでしょう。しかし、他ならないイエスが語る言葉であった、目の前にしている先生のまなざしから語られる言葉であったので、彼は、答えたと言えます。「しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましょう」と。「しかし」「お言葉ですから」「〇〇しましょう」このひと言がなかなか言えないのが、わたしたち人間です。わたしたちの多くはこうです。「でも先生」「だって先生」「神さま無理です。そんなことは」…

ペトロは、このとき、（誤解なくいえば）キリストではなく！先生イエスというすばらしい神の人格者＝福音的人格に出会っているのです。舟の艫の方から「漁に行こう」と語るイエスを見て、「この人なら」という思いにさせられて、ペトロは、網を打ったのです。

そして、ペトロは、一人では打ちません。仲間に声をかけます。ヤコブとヨハネです。神と出会って、何かを始めるとき、それは、孤独な作業ではありません。三人、これが大事です。二人では対立します。一人では挫折します。しかし三人なら、対立や孤独を乗り越えられるのです。教会の発展とキリスト教の伝道もそうです。一人でしゃかりきになっても駄目です。二人で喧嘩ばかりして進めても駄目です。三人以上が必要です。

大量の収穫がありました。イエスに出会い、イエスの言葉を聞き、イエスに従った結果が、大量の収穫です。大量が重要なのではありません。収穫があったということです。大量は、後からついて来た結果、二次的なことです。何一つ取れない、何もいいことがないと思っていたときに、御声を利き従って、網を打った、すると収穫があった。それが重要なのです。

わたしたちの欠点の一つは「諦めの早さ」です。まだ、何もしていない先から「無理と諦める」「そんなことがあろうか」と思ってしまう。人間の思惑や計算がどうしても先だってしまうのです。聖書を読むときの物差しは、「神さまの先行する恵み」「先頭を行くイエス」です。この旗印を見失うことなく、聖書の言葉には触れてゆかないと、御言葉になりません。

３．

ペトロの言葉には、先生から主への告白への変化があります。福音的な人格者が主＝救い主キリストに変わった瞬間です。ただし、彼は、いささか否定的、ネガティブな変化です。「離れてください！わたしは罪深い者です！」これは、まだ旧約聖書の神感にとどまっている状態です。人間の汚れを嫌い裁く神のイメージのままです。しかし主イエスは、罪を裁かれるために、ご自分をささげられた方です。十字架に掲げてしまうほどに、人間の罪の赦しを願われる方です。ペトロは（わたしたちは）離れるどころか、主のもとに近づいて、涙し、悔い改めて、感謝することへと招かれているのです。裁きを恐れる、ヤコブ、ヨハネ、らを含めて、３人に主イエスは言葉をかけられます。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる」と。伝道者の誕生です。彼らは舟を陸に引き上げすべてを捨ててイエスに従います。

ここにあるのは、主に招かれて従った３人です。それは「捨てて、拾う人生に変えられた」

３人です。キリストに出会う（イエスに出会う）とは、そこから、キリストへの告白に導かれ、自分の人生を脇へ置くのです。ある意味、捨てるのです。そして、新しく、神に仕える、神に従う人生に必要なものを、改めて、一つひとつ、キリストの名によって拾い直してゆくのです。その一人ひとりの証しのある生き方が、伝道となり、教会を造ってゆきます。